

2025年度 入学試験問題
(仙台・東京・東海・高松会場)

国 語

(6 0 分)

〔 注 意 〕

-
- ① 問題は㊦～㊨まであります。
 - ② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
 - ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入すること。
 - ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入すること。
 - ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。
-

西大和学園高等学校

問題は次のページから始まります。

一 次の記事を読んで、あとの問いに答えよ。

技術とは何だろうか。それは伝統的な哲学におけるとても大きな問いである。

古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、技術を、ある目的を達成するための手段を製作する営みとして定義した。人間がそうした活動をもっとうまく果たすことができるのは、自然現象を人工的に模倣したときである。したがってアリストテレスは技術を「自然の模倣」として説明している。

例えば伝統的な農業では、春に種を播いて、秋に作物を収穫する。これは自然界における植物のあり方を模倣した技術である。夏に種を播いたり、冬に収穫しようとしたりしても、農業はうまくいかない。なぜならそれは自然を模倣できていないからである。

A 技術をうまく行使するために、私たちはまず自然をしつかりと観察し、その本質を理解しなければならぬ。農作物が自然においてどのように育つのかを知らなければ、農業をうまく行うこともできないのである。

こうした技術観は、自然が人間を凌駕する存在であり、人間よりも優れていると考える自然観の上に成り立っている。人間が自分で考えつて行うことよりも、自然の摂理に従ったほうがずっと確実であり、はるかに信頼できると考えられているのだ。B、

B

— 1 —

例えば、一五世紀の発明家であるレオナルド・ダ・ヴィンチは、人間に空を飛ぶことを可能にする機械を構想した。その際、彼はまず鳥の羽の構造を観察し、鳥がどのようにして浮力を作り出しているのかを、その羽の形状と運動から分析した。そして、同じ原理によって人間が空を飛ぶために必要な技術的機構を考案したのである。実際に、ダ・ヴィンチの考えた空飛ぶ機械は実現しなかったが、ここには「自然の模倣」という技術観の反映が見られる。すなわち彼は、空を飛ぶ技術を実現するために、まずは自然において空を飛んでいるものを観察し、それを模倣しようとしたのである。

しかしこうした技術観は近代の始まりとともに X。その変革を起こした代表的な思想家が、一六世紀の哲学者フランシスベーコンだ。

技術を「自然の模倣」として捉えるとき、私たちは自然を観察し、そのあとにそれを技術へと落とし込んでいく。まずは自然の観察、次に技術への実装という順番だ。この順番は変わらない。第一に優先されるのは自然を観察することなのである。それは「自然ファースト」な発想である、と表現できるかもしれない。このとき自然の観察はあくまでも技術に先行するものとして位置づけられている。つまり、自然の観察そのものは、あとでそれを技術に使うかどうかとは無関係に行うことができる。自然の観察にとって、その

成果を技術に使うか否か、ということは、あくまでも「おまけ」に過ぎない。^①

ペーコンはこのような発想を根本的に変更した。彼によれば、自然の本質は、人間が自然に対して積極的に働きかけ、その結果を検証することによって、初めて解明される。そうした働きかけこそ「実験」に他ならない。

例えば、近代科学の父と言われるガリレオ・ガリレイは、重たいものほど早く落下するというアリストテレスの自然哲学を反駁^{はんぱく}するために、レールを使って異なる重さのボールを落とす実験を行った。このとき彼は単に自然を観察することによって知識を得たわけではない。わざわざ重さの違うボールを用意し、わざわざレールを作り、それを自分で動かすことによって、自然法則を解明しようとしたのである。レールも、ボールも、明らかに自然なものではない。誰も踏み入れない森の奥地で人知れずレールの上を重さの異なるボールが転がってなどいない。ガリレオは、そのように自然には存在しない人工的な環境を技術的に構築することで、むしろ自然の本質に迫ろうとしたのである。

ペーコンは、このような実験こそが、人間の知識にとって不可欠の^a「ケイキである」と考えた。実験は、自然を理解するために、自然に対して技術によって働きかけることである。自然をただありのままに観察していても、自然を理解することはできない。それを可能にするのは実験という技術の営みなのだ。この意味において、ペーコンはもはや自然ファーストではなく、^②「技術ファースト」な考え方をしている、と言えるだろう。

(中略)

実験に基づく自然の探究を重視する態度は、一七〇一八世紀に^bリウウセイ^③した啓蒙思想へと結実する。これは、人間が理性の力によって自然に隷属した状態を乗り越え、社会を進歩させることができる^cと考える思想運動である。一八世紀の後半には産業革命が起こり、科学と技術は相互に一層緊密に連動することになる。ヨーロッパ諸国の産業の工業化が推し進められ、人類のエネルギー消費量も飛躍的に増大することになった。

しかしその帰結が、必ずしも幸福だけをもたらすわけではないということを、^c人類は思い知ることになる。

(中略)

技術は人類に幸福をもたらすはずだった。技術を発達させればさせるほど、人類は悲惨さを免れるようになるはずだった。しかし、二〇世紀に明らかになったことは、技術がむしろ人類に対して未曾有の破局をもたらすということだった。

なぜそんなことが起きてしまったのだろうか。

第二次大戦後、^(注1)フランクフルト学派の旗手として台頭した哲学者のテオドル・アドルノとマックス・ホルクハイマーは、その理由を次のように説明した。啓蒙思想において人間は理性の力によって社会を進歩させ、自然への隷属から解放され、幸福を実現できると考えられていた。しかし、実際には啓蒙は人間を社会という「第二の自然」に隷属させることになった。私たちが社会の進歩だと考えているものは、結局のところ、この第二の自然への隷属をさらに深めていく。カテイに他ならない。私たちは、啓蒙が進めば進むほど、社会が進歩すればするほど、そこから逃れることができなくなり、それがもたらす悲惨さに深くはまり込んでいく。

⁽⁴⁾人間が「第二の自然」に隷属するということは、人間自身が人間の力によって支配される、ということである。「啓蒙が事物に対する態度は、独裁者が人間に対するのと変るところはない。独裁者が人間を識るのは、彼が人間を操作することができるかぎりである」。例えば全体主義において、人間を理解するということは、人間を操作可能にするということと同義だった。どんな風に働きかけたら人間が権力に服従し、自発的に加担するかを知ることが、人間を知ることの意味していた。これは、実験という技術的な働きかけによって自然を解明しようとする態度と、ツウテイしているのである。

こうして「自然の模倣」から「自然の支配」へと変化した人間の技術は、現代に至って、「人間の支配」とでも呼ばれるべき事態を明らかにした。D、人間がどれほどテクノロジーによって自縄自縛にオチイリ、大きな過ちを犯し続けるのだとしても、自然の自己修復能力がそれを帳消しにしてくれるのなら、未来世代には何も影響しない。しかし、そうした期待は夢物語に過ぎない、ということが、近年明らかになりつつある。

（『未来倫理』 戸谷 洋志）

（注1）フランクフルト学派：啓蒙主義を批判する社会理論や哲学を研究したグループ。

問一 二重傍線部 a ~ e のカタカナを、それぞれ漢字に直せ（楷書で、丁寧に書くこと）。

問二 空欄A～Dにあてはまる最も適當なことを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。同じ記号は一度しか使えない。

ア やがて イ そして ウ すなわち エ もちろん オ したがって

問三 空欄Xにあてはまる最も適當なことを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 覆されていく イ 保たれていく ウ 検討されていく
エ 指摘されていく オ 肯定されていく

問四 傍線部①「あくまでも『おまけ』に過ぎない」とあるが、それはなぜか。五十字以内で説明せよ。

問五 傍線部②「『技術ファースト』とはどういうことか。三十字以内で説明せよ。

問六 傍線部③「啓蒙思想」の説明として最も適當なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 啓蒙思想は、個人の利益を優先し、国民の私生活を尊重しながら統治する体制である。

イ 啓蒙思想は、人間を自然から完全に解放し、人類が幸福を享受することを可能にしたとされる。

ウ 啓蒙思想は、技術の発展が人類の幸福に直結すると考え、実験によって社会進歩を目指す思想運動である。

エ 啓蒙思想によって人間が社会を進歩させることは、逆に自然への隷属を深める結果となると、フランクフルト学派は指摘した。

オ 啓蒙思想において、自然を支配する方法として理性を用いるが、それが戦争を防止する役割を果たすと信じられていた。

問七 傍線部④「人間が『第二の自然』に隷属する」とあるが、なぜか。本文全体をふまえて八十字以内で説明せよ。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

夏枝は幼少期、貧しい暮らしのなかで学業に励み、成績優秀者には授業料を免除する制度のある大学に進学した。社会人となり大きな問題も無く日々を過ごしていたが、離婚や同じ職場の聖子とのトラブルをきっかけにうつ病を発症し、自宅で療養することとなった。

背番号2やや長い黒髪、するどい眼光。見た目は確かに流川るかわに似ているかもしれない。が、数分ながめて、彼のプレースタイルは、どちらかというと主人公の桜木花道さくらぎはなみちのほうに近いと夏枝は思った。ゴール下でリバウンドをもぎとり、得点につなげる執念。屈強な上半身ととびぬけた身体能力――^a 気づくと持ったままのリモコンを、つぶしそうなほど強く握りしめている。体の奥から、激しい衝動をともなった何かが、つきあげてくるのを感じる。

小中高と、夏枝はずっとバスケットボール部だった。^(注) スラムダンクは連載がはじまった当初から、バスケット部の男子たちにすすめられて読んでいた。一番好きだったのは流川でも花道でもなく、三井みついだった。周りの女子はみんな三井が好きだった。三井にアコがれて、必死で3Pシュートを練習するようになった。けれど漫画で描かれるようなきれいなシュートはちつともできなくて、毎日居残りで練習しても、試合で全然決まらなかった。

引退試合は関東大会予選の二回戦。相手は私立の古豪、対するこちらは弱小中の弱小の都立高。前半で30点近くリードされたが、後半ラスト十分時点で9点ビハインドまで追い上げた。

そのとき、ボールがすっぽりと、パズルのピースのように自分のところへやってきた。しかもノーマーク。

心の中に、三井の「落とす気がしねえ」の声があった。股関節からまげて腰を落とし、下半身の力を上半身へまっすぐ伝える。すべて練習した通り。そして、ボールが自分の腕から放たれた。

それがゴールネットを音もなく潜り抜けるまで、永遠のように感じた。

ワースと歓声があがり、仲間たちがかけよってきた。しかし、よろこぶにはまだはやい。あと二回同じことを繰り返せば、追いつける。そう思ったが、その後、立て続けに相手チームにゴールを奪われ、終わってみれば、再び30点近くのリードをつけられての大敗となった。

試合終了のホイッスルが鳴った途端、チームメイト全員の顔にわっと涙があふれた。抱き合って、いつまでも泣いていた。試合後の

挨拶でも泣き続け、監督からの最後の話を聞いているときも泣いて、帰りの電車でも後輩たちと手を握り合って泣いていた。そのとき、電車の窓の向こうに広がる茜色あかねの夕日と、どんどん近づいてくる見慣れた小菅こすげの東京拘置所、その風景をはっきり覚えていて。青春のきらめき。それが今、目の前で、ふっと消えた。^①あとの人生はずっと消化試合かもしれない。そんなようなことを思いながら、べたべたの頬ほほを手の甲で拭った。十七歳だった。

画面の中の日本代表チームは、勝利を飾った。夏枝はテレビを消すと、ふたたびベッドに寝転がり、スマホで車いすバス界の流川楓について調べた。その後、眠たくなるまで、ユーチューブにあがっている彼のインタビュー動画や密着動画を見続けた。

それからほぼ毎日、車いすバスケットボールの試合を見るようになった。はじめはベッドに寝たままぼんやりながめているだけだったが、やがてきちんとテレビの放送時間やネットの配信時間を調べるようになった。元気があるときはなるべくその前に風呂と食事を済ませ、テーブルにコーヒーを用意し、リビングの大きなテレビで観戦した。日本代表が出ていない試合もチェックした。

日本代表は順調に勝ち進み、決勝戦まで駒を進めた。相手はデیفエンディングチャンピオン・アメリカ、まさに不足なし。決勝戦は十二時半開始予定だった。夏枝はそれにそなえて、^b数日かけて昼夜ぐちゃぐちゃだった睡眠時間を調整し、その日は朝七時過ぎに起床した。ジャンプボールまでかなり時間があつたので、^a久しぶりに掃除もした。

日本代表は開始早々、エースの選手が鮮やかな3Pシュートを決めて序盤はリードする展開となった。が、敵も^Aさるもの、圧倒的なスピードと攻撃で追い上げられ、^{注2}第2Qで逆転を許した。その後、車いすバス界の流川の再逆転シュートなどもあり、一進一退の攻防が続いたが、日本は勝負どころで失点を許し、最終的には60対64で敗れ、銀メダルとなった。

試合終了のホイッスルが鳴らされると、アメリカ選手たちは涙を流してチームメイトと抱き合い、日本選手の中にも悔し涙に目を赤くしている人が数名いた。夏枝は車いすバス界の流川の姿を必死で探したが、なかなか映らなかった。ようやく見つかった彼は、相手チームをたたえて拍手をしていた。表情は一見おだやかだが、その目は静かに強く燃えていた。かたく結んだ唇で、こみあげる悔しさを必死に飲みこもうとしているように見えた。

テレビを消した。少し考えてから、部屋の隅にある姿見の前に立った。

ぞっとした。生気のない、くさった飴玉あめだまみたいな目が二つ。肌は真冬に指摘された通りの土色をしていて、頬はこけ、まるでゾンビみたいだ。引きこもりのゾンビババア。自分もかつて、車いすバス界の流川のような目をしていたことがあったのだろうか。勝つか負けるか。目の前にあるのはそれだけだった頃。

ソファに戻り、スマホを手にとった。^(注3)LINEの未読メッセージが八十二件もあった。しかしそれはまだスルーしたまま、アマゾン

のアプリを開いて、^② ウイルソンのバスケットボールを購入した。

バスケットボールは翌日の午前中に届いた。明るいうちに出かける勇氣は持てず、誰もいないであろう夜十時過ぎになって、ボールを手にも公園へ向かった。

ジョギングや犬の散歩をしている人が数名いたものの、昼間に少し雨が降ったのもあって、普段より人は少なく思えた。こんな夜でも、というよりこんな夜ほど、バスケットゴールの周囲には若者がたむろしていることが多いが、今晩は無人だった。

家を出る前にも入念にストレッチしたが、その場でも屈伸運動をした。それから、いつかの晩見たバスケ少年が立っていたのと、ほぼ同じ位置に立つ。よし、と口の中だけで言って、3Pシュートを放ってみた。

当然、入らない。いや、入らないどころか、ゴールより低い位置までしかボールがあがらなかった。それでも入るまで何時間でもやるつもりだったが、十分もたたないうちに腕がしびれてきた。やむなく帰宅すると、ユーチューブでバスケ動画を漁り、繰り返し見た。翌日も同じぐらいの時間に公園にいった。やはり十分ほどやったが、一度も成功しなかった。そのときになって、暗くてよく見えないのがダメなのだとようやく気づいた。

さらに翌日、意を決して午前中に公園へ向かった。いつも使っているバスケットゴールまでいくと、大学生ぐらいの男子二人が1on1をやっていた。二人はそれぞれ白と黒のTシャツを着ていて、まるでオセロみたいだと思った。黒いほうが夏枝の姿に気づき、はじめは無視したが、何か気になったのかすぐにまた振り返って「いいボール持ってますね」と声をかけてきた。

「し、新品なんです」

話しかけられるとは予想しておらず、動揺してそんなどうでもいいことを口走ってしまう。

「あ、使います?」と白いほうが、気のよさそうな笑顔を向けながら言った。

「いいです」と断ろうとして、思いとどまった——ここで逃げたら、わたしは引きこもりゾンビババアのままだ。

「あの、3Pシュートの練習をしたいんですけど、なかなかうまくできなくて。あとでいいので、教えてもらえませんか?」

二人は虚をつかれたように互いに顔を見合わせた。黒いほうが戸惑いながら、「あの、まあ、俺らでよければ」と言った。

それから、臨時のシュートレッスンはじまった。聞けば白いほうは近所の小学生チームのコーチをしているらしく、指導はお手の物といった様子だった。アドバイスを受けて五本ほど打っただけで、一人でやっていたときには感じられなかった手ごたえのようなものをつかめた。

「さすが経験者、うまいですよ。あと少しです」

黒いほうがそう言って励ましてくれる。そして、十五本目——膝をまげ、モーションに入った瞬間から、これは、という感覚があった。そのとき、白いほうがふざけたような調子で、ふいに言った。

「X」

自分の体から放たれたボール。永遠とも思える時間。見たこともないぐらい美しい弧を描いて、ゴールネットを静かにくぐった。

「うわー！すげー！」

「やった！」

まるで一世一代の大会で決勝ゴールを決めたかのように、若い二人は大はしゃぎした。けれど夏枝はその場に立ったまま、わずかに揺れるぼろぼろの今にもちぎれそうなネットを見つめつつ、静かに、こう思っていた。

——立ち直った。

わたし、立ち直った気がする。誰かと一緒に暮らさなくても、配偶者を得なくても、こうして通りすがりの人の親切を少し借りながら、一人で、自分の力で、立ち直った、そんな気がする。

気づくと頬に涙が伝っていた。それを見て、男子二人は急にゾンビにでも出くわしたように顔をこわばらせた。逆にその様子が夏枝にはおかしくて、思わずふふふと笑ってしまった。

「何百万本もうってきたシュートだ」

夏枝が言うのと二人はぼかんとしていた。黒いほうが「なんすか、それ」とつぶやく。

「いや、流川の名言だけど。しらないの？」

「しらないっす」

なんで「落とす気がしねえ」はしっててこっちはしらないんだ思ったが、口に出さなかった。その後、二人に礼を言って、公園をあとにした。^③ 帰り道の途中にある眼鏡屋で、老眼鏡を買った。

一日もオーバーすることなく、二ヶ月ちようどで、休職を終えた。

体調はまだ万全ではなかったが、改めて受診した更年期障害専門のクリニックでもらった薬の効果が、少しずつ出はじめていた。まだ体のほてりや気分の浮き沈みはあったものの、慢性的なだるさがかなり改善した。何より、一日三十分のジョギングと3Pシュート練習十本を習慣化したおかげか、夜にぐっすり眠れるようになったのが大きかった。

復帰初日、聖子は午前中半休をとっていた。午後、出社してきた彼女の顔を見て、夏枝は「おはようございます」と大きな声で挨拶

をした。聖子はまるでこちらが透明人間でもあるかのように、^C一瞥もくれずに自席についた。

ぎゅつと目を閉じ、車いすバスケット界の流川の顔を思い浮かべる。気にするな、自分のことをやれ、と彼が夏枝を励ましてくれる。

その日一日、これまでにない緊張感の中、仕事をした。幸いにもミスは一つもしなかった。良子が四時前にあがらせてくれた。事務所を出ると、外はまだ明るかった。

スマホを出して、真冬にLINE電話をかけた。出なかったので、メッセージを送った。

冬さん、今更だけどごめんね。八つ当たりして、ひどい態度とってしまいました。今日、無事に仕事復帰しました。

すぐに既読がついて、返事があった。

わたしも、美人で有能な夏ちゃんに嫉妬して、意地悪を言ってしまったのかもしれない。反省してます。ごめんね。復帰おめでとう。

今、バイト中で、もうすぐ終わる。この後、うちくる？

いく！

と返信して、スマホをバッグにしまうと、腕を伸ばして伸びをした。立ち直った。また思う。たった一人で暮らして、たった一人で立ち直った。きつとまた悪くなるときもあるだろうけど、とりあえず今は、^④立ち直った。一人で。わたしが生きたかった人生はこれなんだ、と思う。息を大きく吸い込んだら、キンモクセイの匂いが鼻を抜けた。あのボロ家の窓から見ていた小さな空は、もう思い出さない。

『俺はこのままひとりぼっちで、いつかおかしくなってしまうだろうか』 南 綾子

(注1) スラムダンク：バスケットボールを題材にした漫画。流川・桜木・三井はその漫画に登場する人物。

(注2) 第2Q …バスケットボールは1Q10分で行い、一試合は4つのQで構成されている。

(注3) LINE …メールや通話が出来るアプリケーション。

(注4) 更年期障害 …加齢による女性ホルモンの分泌低下が原因で起きる身体の不調。

問一 二重傍線部A「さるもの」B「やむなく」C「一瞥もくれず」の本文中の意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

A 「さるもの」

ア 諦めが悪い相手

イ かなり素早い相手

ウ 生意気な相手

B 「やむなく」

エ 相当な力量の相手

オ 予想通りの相手

ア どうしようもなくなつて

イ 満足して

ウ あきらめて

エ いやになつて

オ 中断しないで

C 「一瞥もくれず」

ア お祝いを渡してくれることもなく

イ 笑顔を向けてくれることもなく

ウ あいさつを返してくれることなく

エ 寄り道することもなく

オ ちらりとも見ることなく

問二

空欄

X

に当てはまる語を本文中から探し、抜き出して記せ。

問三

傍線部①「あとの人生はずっと消化試合かもしれない」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア バスケットボールを引退後、自分が本気で取り組みたいようなものには出会えないだろうということ。
- イ 引退試合での惨敗から自信を失ってしまい、今までの自分のような行動をとれないだろうということ。
- ウ 同級生や後輩に励ましてもらったものの、今後は自分より強い相手には物怖じするだろうということ。
- エ どんな試合をしたとしても、今日の試合を超えるような白熱した試合にはならないだろうということ。
- オ 一緒に戦った仲間への思いが強すぎるあまり、他の誰かに心を許そうとは思わないだろうということ。

問四

傍線部②「ウイルソンのバスケットボールを購入した」とあるが、その理由を説明した次の文を空欄の指示に従って完成させよ。

三十字以内

を目の当たりにし、せめて自分が変わるための一步を踏み出さなければならなかったから。

問五 傍線部③「帰り道の途中にある眼鏡屋で、老眼鏡を買った」とあるが、これはどのような心情の表れか。その説明として最も適

当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 自分が立ち直った記念として、病気になる前から欲しいと思っていた眼鏡を購入できるという喜び。
- イ 二人の若者と交流することで得た、ありのままの自分で目の前の壁を乗り越えていこうという決意。
- ウ 若者との感覚の隔たりに驚き、自分が若いと思っていたのは勘違いだったのではないかと不安。
- エ 会話が上手く弾んだことで、今後も若者達との交流を続けていくことが出来るだろうという期待。
- オ 若者に生きていないのと同じだと見なされたことによって、自分の老いを確信したことでの落胆。

問六 傍線部④「立ち直った」とあるが、それを説明した次の文を空欄の指示に従って完成させよ。

職場での人間関係のトラブルをきっかけに生きる氣力を失っていたが、四十字以内ということ。

問七 本文の表現と内容の特徴を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 波線部 **a** には自分を今のような苦境に追い込んだ人たちに対する夏枝のうちに秘めた激しい怒りが表現されている。
- イ 波線部 **b** には自分とは直接関係の無い日本代表の試合であるにもかかわらず、緊張を隠せない夏枝の様子が表現されている。
- ウ 波線部 **c** には他人との接触を避けてた夏枝の誰かと関わってでも現状を打破したいという強い気持ちが表れている。
- エ 波線部 **d** には自分たちのせいで女性を泣かせたと勘違いし、取り乱している若者の人生経験の浅さが表現されている。
- オ 波線部 **e** には困窮していた幼少期の家の様子を忘れさることで、夏枝が学生時代の自分と決別したことが表現されている。

問題は次のページに続きます。

三

理想的な女性を探す秋の君が、中納言の君（中納言）と碁を打っている姫君（君）を垣間見る場面である。次の文章を読んで後の問いに答えよ。

（秋の君）やがてそなたさまに立ち寄り 給^aひて、渡殿の妻戸の隠れに、しばし立ち聞き給へば、若き声にて、

「久しく御碁こそ打たせ給はね」

など言へば、大宮の御方より参りたる中納言^{今は姫君に仕える女性}といふ若人の声にて、

「参^①り心み侍らん」

など言ひて、碁盤取りて参る音す。

やがて妻戸より通りて、やをら見給へば、中障子は立てて、ここもとは人もなし。見ゆべき所やあると求め給へば、引き手のもと

にいささかなる穴のある、うれしくて見給へば、几帳も押しやられて、いとよく見ゆ。二十歳ばかりにやあらんと見えて、ほこりかに大きやかなる人の、白く心地よくなるさまして、額少しはれたる心地す。きよげなりとは見えながら、いま少しらうたきところをあらせばやと見ゆ。髪のかかれるほどはしも、けしうはあらず見ゆ。けしうは限りの人々さし集ひて、見証し、もの言ひなどすれば、君

もつつましげならず、華やかにうち笑ひなどして、紅葉の濃さ、単衣、紅の打ちたるを着給へる、引き合はせしどけなく、胸のほどさながら見えて、黒きに映えて、けざやかに白く見ゆるほどは、好もしとも言ひつべけれど、袖に包まむとまではおぼえぬも、心やすげなり。

つくづくと見給へるも、さすが人や見つけんとそら恐ろしくて、立ち退き給ひて、今おはするやうにて、うち声づくり給へば、

驚きたる気色どもにて、碁も打ち差し、さまよひたる几帳引きなほしなどして、褥差し出でたれば、鮮やかなる直衣に、織物の指貫たをやかに着^eなして、あたりも所せきまで匂ひ多く、ものより殊に見え給ふには、おぼろけならん人は差し向かひにくく、恥づかしげなるに、碁打ちつる中納言の君、

「御簾の前はかたじけなくや」

と聞こゆれば、^f

(秋の君)「何かは渡るとばかりだに、とがめられ奉らぬ吉野川なれば、浅き瀬にのみなり侍りて、御簾の前も、いまだに許させ給はでや」

とて、ⁱ引きかづき給へば、侘びしと思したれば、短き几帳引き隔てて、^上半身だけ中にお入れになると、姫君が困ってしまったので

(中納言の君)「浅瀬白波は、御心づからにや聞こえ侍らん。今よりこそは、深き方にも」ⁱⁱ

など、^洗練された若女房で、巧みに申し交わして、^洗練された若女房で、巧みに申し交わして、^洗練された若女房で、巧みに申し交わして、

(秋の君)「まめやかに、ⁱⁱⁱ変はらぬ妹背とのみ頼み聞こえさするを、むげにうとうとしくもてなさせ給ふなん、いみじう恨めしき」ⁱⁱⁱ

(姫君)「ここに思ひ聞こゆるさまは、まさりてや」^{iv}

と、^口早な感じで応えなざるので、^口早な感じで応えなざるので、^口早な感じで応えなざるので、

(秋の君)「増すまではいかかと、卑下せられ侍るを、等しからんのみぞ、かひあるべきわざなる」^v

と言ひ交はし給ふに、^{vi}御いらへなどつつましげならず、おほどかにもあらぬは、心劣りせらるる。暗うなれば、

「またも」

とて立ち給ひぬ。

わが御方におはして、うちやすみ給ひても、

「^⑥なほ思ふやうなる世は、難きわざなりけり。こころ人のかたち、心ばへ見集むるに、心とまるばかりの人は、^⑦えなん見出でぬか

な。名高く聞こえ給ふ宮たち、いかで見奉るべからむ。このありつる君を、^⑧けしうはあらずと聞こえしかば、さる方に心やすきよるべ

にもなど、かねては心ときめきせられしかども、玉の井の水はかひなく」

思ひつづけられ給ふ。

問一 二重傍線部 a 「給ひ」は、終止形は「給ふ」で「ゝなさる」と訳をする尊敬語だが「給ふ」の読み方を、例に従って答えよ。

例 てふてふ「ちょーちょー」

問二 二重傍線部 b 「ん」は「だろう」と訳す助動詞である。この「ん」の活用形は何形かを答えよ。

問三 二重傍線部 c 「立ち退き給ひ（立ち退きなさる）」、d 「驚きたる（気づいた）」、e 「着なし（着こなしなさる）」、f 「聞こゆれ

（申し上げる）」の、主体（主語）を次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。それぞれの記号は複数回選んでも良い。

ア 中納言の君 イ 姫君 ウ 秋の君 エ け近き限りの人々 オ 御簾の外の人々

問四 傍線部①「参り心み侍らん」、傍線部③「けしうはあらず見ゆ」、傍線部⑤「さすが人や見つけん」のそれぞれの解釈として最も

適当なものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。

① 「参り心み侍らん」

ア どうして打たないのか
イ お相手いたしましょう
ウ どうしても打ちますか
エ しようとは思いません
オ お相手はいたしません

③ 「けしうはあらず見ゆ」

ア あやしく見えない
イ 美しくはないです
ウ とても美しいです
エ 悪く見られている
オ 悪くはなく見える

⑤ 「さすが人や見つけん」

- ア さすが美しい人が見えていると思うと気持ち揺らいでいく
イ 美しい人なので私以外の高貴な人が見つけてしまうだろう
ウ こっそりのぞいているとはいえ人が見つかるかもしれない
エ こっそりのぞいていることがばれたなら白状するしかない
オ こっそりのぞくのは美しさより恐怖を見つけることになる

問五

傍線部②「見ゆべき所やあると求め給へば」について、次の説明にあてはまることば「X」を答えよ。
《秋の君は、「X」を探し求めたということ。》

問六

傍線部④「袖に包まむとまではおぼえぬ」は、「袖に包む」の比喩を明らかにして解釈するとどういうことを表しているか、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 人目を避けて涙を流そうとは思わないこと。
イ こっそりと金品を送ろうとは思わないこと。
ウ とても大切に世話しようとは思わないこと。
エ ひそかに金品をぬすもうと思ったこと。
オ しっかりと閉じ込めようと思ったこと。

問七

波線部について、正しくない解釈がある。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア i 「二人の浅い仲ということで、簾の前にいることさえ許してくれないのか」
イ ii 「二人の仲は浅いと聞こえる。これからは二人の深い仲と思ってほしい」
ウ iii 「二人の仲をあてにするのに、よそよしくあしらわれるのは恨めしい」
エ iv 「私があなたを慕う気持ちの方が、あなたより勝っているのではないか」
オ v 「私には中納言の君と姫君のどちらかを妻として選ぶことなどできない」
カ vi 「返事も慎ましげでなく、おっとりしていないのは、心劣りしてしまう」

問八 傍線部⑥「なほ思ふやうなる世は、難きわざなりけり」とあるが、秋の君はどう思っているのか、最も適当なものを、次の中から

一つずつ選び、記号で答えよ。

- ア たくさんの女性を見たいという夢は叶わないということ。
- イ 自分の思う通りの女性はいないと思っっているということ。
- ウ 思い通りの政治を自ら行うことは到底無理だということ。
- エ 自分の思い通りになるのは前世でなく来世だということ。
- オ 現世での幸せはあてにできないから出家するということ。

問九 傍線部⑦「えなん見出でぬかな」を口語訳せよ。ただし、「見出づ」は「見出す」と訳す。

問十 傍線部⑧「かねては心ときめきせられしかども、玉の井の水はかひなく」とは、どういうことか、最も適当なものを次の中から

一つ選び、記号で答えよ。

- ア 玉の井戸の水を以前から飲みたいと思っていたので、その水を飲めたことがとてもうれしいということ。
- イ 井戸をのぞき見た時は胸ときめかせたが、姫君とは一緒に水を飲めないと思うと物悲しいということ。
- ウ のぞき見た時はドキドキして楽しかったが、それをやめると高揚感は水泡のように消えたということ。
- エ 対面するまでは胸がときめいたが、姫君に会ってみるとがっかりしたと秋の君が思っているということ。
- オ 実際に会うまでは期待で心がおどったが、秋の君に会ってがっかりしたと姫君が感じているということ。

問十一 本文全体を、六十字以内で要約せよ。採点に文字数は関係ないものとする。優れた要約であれば、二十字であってもこの設問の満点を施す。



名

4)